

平成 2 1 年 6 月 9 日現在

研究種目：基盤研究（C）
 研究期間：2006～2008
 課題番号：18520581
 研究課題名（和文） ヨーロッパ市場における東洋陶磁器の消費動態に関する考古学的研究
 研究課題名（英文） Archaeological study about the consumption situation of the Oriental ceramics in European market.
 研究代表者
 堀内 秀樹
 東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
 研究者番号：30173628

研究成果の概要：本研究は、ヨーロッパ市場の東洋陶磁器需要とそれを使用して行った文化的行為との関連について明らかにした。本研究において行ったヨーロッパ消費地遺跡出土の東洋陶磁器の分布調査によって、文化的行為との関連性が認められ、オランダやイギリスあるいは商館など東洋の拠点における需要には差異が認められ、ヨーロッパ域内においても需要の強さや内容が大きく異なっていることが確認できた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	600,000	180,000	780,000
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	600,000	4,100,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：考古学

キーワード：考古学 東洋陶磁器 ヨーロッパ 消費

1. 研究開始当初の背景

これまで行われてきた東洋とヨーロッパ間の貿易陶磁器研究は、大きく二つの流れがあった。一つは美術史・陶磁史の中で行われてきた西田宏子に代表される大略的な明末・清初における様式変化に関する議論（西田宏子他『明末清初の民窯』平凡社 1997）であり、もう一つは考古学の中の生産地で大橋康二や藤原友子らが行っている肥前陶磁器を中心に行われていたもの（大橋康二「海外

流通編』『伊万里市史 陶磁器編 古伊万里』伊万里市 p597-876 2002、藤原友子「『古伊万里の道』展について」『古伊万里の道』佐賀県立九州陶磁文化館 p143-165 2000）であった。これら研究に共通している点は、特定の地域に現在まで遺存した製品を対象にしたり、肥前製品など特定の生産地に限定した部分研究であることで、この視座からは東洋陶磁器貿易の全体復元は難しい。

考古学では日本の他に中国福建省漳州窯

の発掘調査や研究は近年盛んに行われ大きな成果を上げているが(福建省博物館『漳州窯』1997、愛知県当時資料館・関西近世考古学研究会『呉須赤絵と漳州窯系磁器 - その生産・流通と日本における受容 - 』1997 など)その研究の中心は日本との関係に主眼がおかれていたし、ヨーロッパ貿易の中心的貿易窯の景德鎮窯、徳化窯ではこれまで清代における研究が低調であった。また、中継地に関しては、野上建紀が沈船資料の研究から中継地点の重要性がようやく指摘された段階である(野上建紀『近世肥前窯業生産機構論 - 現代地場産業の基盤形成に関する研究 - 』2002)。中継地資料として「蔵」の存在をも指摘された(川口洋平「蔵と沈没船」『一括資料と基準資料 - 近年の注目資料から - 』日本貿易陶磁研究会 p87-93 2005)。

2. 研究の目的

本研究は、17～19世紀のヨーロッパの中で時間、空間、階層などの違いにより、多様な様態を示すであろう東洋陶磁器の消費状況を明らかにすることによって、ヨーロッパを市場化した東洋陶磁器についての生産、流通、消費の様相把握とその背景にある文化・経済史的復元を目的とする。

バスコ・ダ・ガマの喜望峰発見以来、ヨーロッパとアジアはイスラム諸国を経由することなく直接貿易が可能となり、双方に多大な文物の交流の道が開かれた。特に17世紀以降は各国の東インド会社 - 民間資本 - による商業取引によって膨大な量の貿易が行われたのは周知の通りである。このうちヨーロッパに大きな文化的影響を与えたものの一つとして「茶」とその道具である「東洋陶磁器」がある。東洋陶磁器の研究は、当該期における東西貿易の様態とその背景にあるヨーロッパにおける東洋文化受容のプロセスを解明できる題材であると考えている。

3. 研究の方法

研究全体の構想は、これまでの美術史・陶磁史の中で博物館などに残る伝世品の分析から行われてきた大略的、総論的な研究に対する反省にたち、蔵、沈船など(流通資料)、ヨーロッパや商館など(消費資料)の考古学的資料を用いて詳細なデータを提示した上で東洋陶磁器貿易全体の実態を明らかにするものである。

流通資料ではこれまで行ってきた沈んだ貿易船の資料のほかに、それとの比較をするため平戸、出島、ホイアン、ゼーランディアなど各地オランダ東インド会社の拠点出土資料の調査・分析を踏まえ、流通段階の実態を明らかにする。消費地ではオランダ、イギリスなどヨーロッパ出土資料の現地調査を行う。これらの調査から得られた成果とオランダの文献記録の調査とのクロスチェックを行い、当時の生産、流通、消費の状況から、ヨーロッパ - アジア間における東洋陶磁器貿易の実態を明らかにするとともにその文化・経済史的な背景をも解明する。本研究では、資料調査が重要なデータ獲得の手段となる。資料調査は、以下のように行った。

- ・2006年8月 タイ・アユタヤオランダ商館出土資料調査
台湾・ゼーランディア城出土資料調査
- ・2007年2月 オランダ・都市遺跡出土資料、沈船資料調査
イギリス・ロンドン出土資料調査
- ・2007年12月 長崎市内、出島出土資料調査
- ・2008年2月 ベトナム・沈船資料調査
- ・2008年7月 イギリス・ロンドン出土資料調査
- ・2008年8月 ベトナム・ホイアン出土資料調査

料、沈船資料調査

この他、資料調査は本研究費とは別に 2007 年 10 月に台湾消費遺跡出土資料、2008 年 2 月に平戸、長崎市内出土資料において行った。

4. 研究成果

(1) ヨーロッパの消費遺跡の調査

オランダ

周知のように、1568 年にハプスブルグ家からの独立を企図し、独立戦争を起こす。1648 年のウエストファリア条約により、正式に独立が承認される。

2001 年の調査は、下図、2006 年に行った調査は、の都市である。2001 年の調査の詳細については既に報告済みであるので、参照されたい(堀内 2007)。



オランダの調査都市

2006 年の調査は、研究協力者である金田明美氏に助力を依頼し、海岸部のアルクマー、ザーンダイク、ヴォルマーと南部のドルトレヒト、スヘルトヘンボスおよびアムステルダムの調査担当者の御厚意によって 6 都市について行った。

ザーンダイクでは約 120 点、ヴォルマーでは約 250 点、ドルトレヒトで約 100 点、スヘ

ルトヘンボスでは約 300 点、アルクマーでは約 400 点の東洋陶磁器を確認した。器種は皿、碗、鉢、カップ&ソーサーが多く確認された他、ミニチュア、壺、蓋物、人形などが散見された。肥前磁器はザーンダイクで色絵のカップ&ソーサー、ヴォルマーで色絵のカップ&ソーサーと芙蓉手の皿、ドルトレヒトで色絵のカップ&ソーサーと染付の大皿、アルクマーで染付皿と色絵のカップ&ソーサーが確認できた。

オランダにおける最大の成果は、海岸部と内陸部で問うよう陶磁器の需要に差異が認められたことである。すなわち、海岸部では 17 世紀前半から確認できるのに対し、内陸部では 17 世紀末から増加しており、東洋陶磁器を用いた部屋の装飾、喫茶の習慣が、海岸部から内陸部へと広がりを見せていることが確認できた。

イギリス

イギリスは、ロンドンの調査を行った。ロンドンの発掘調査は 1970 年代から行われており、実見できた東洋陶磁器は 800 点程度である。調査はロンドン博物館の Archaeology Service の Nigel Jeffries 氏の御厚意によって行った。同所に保管されている総量は膨大で、悉皆的調査はできなかった。また、18 世紀後半以降、イギリスの在地の磁器製品が焼成を開始しており、小片では分類が困難な破片も存在した。確認された器種は、皿、カップ&ソーサー、碗が多く、全体的な傾向としてオランダよりヨーロッパ風の文様が多く認められ、器種ではサービスの皿が一定量確認できた。また、頻度は高くないが、一部の製品に焼き継ぎが認められた。肥前製品は、実見した資料の中には含まれていなかった。

イギリスの調査における最大の成果は、オランダと対比の中で需要の差が確認できたことにある。オランダでは、17 世紀前半から

都市部から出土がみられたが、イギリスで確認されるのは、17世紀末以降であった。また、オランダでは、圧倒的にカップ&ソーサーが優越していたのに対し、イギリスでは、プレートが多く確認されたことで、東洋陶磁器の需要がオランダでは主に茶器にあったが、イギリスではディナーセットなどにも需要があったことが確認できた。

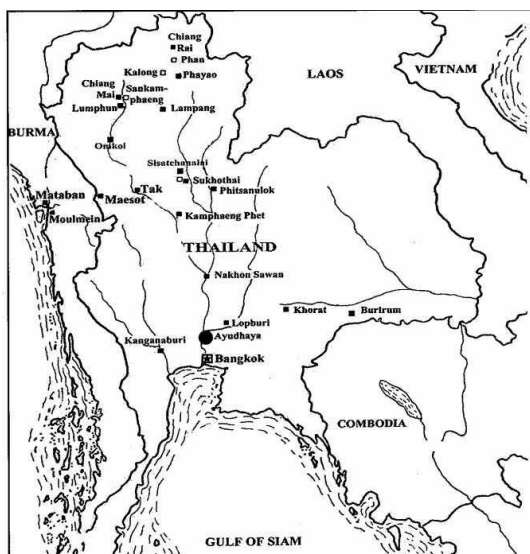
(2) アジアの中継地の調査

タイ・アユタヤ

アユタヤは、1350年にアユタヤ王朝の首都となり、1767年にビルマによって滅ぼされるまで存続した。オランダ東インド会社は1634年にアユタヤ商館を設立。貿易の拠点とした。

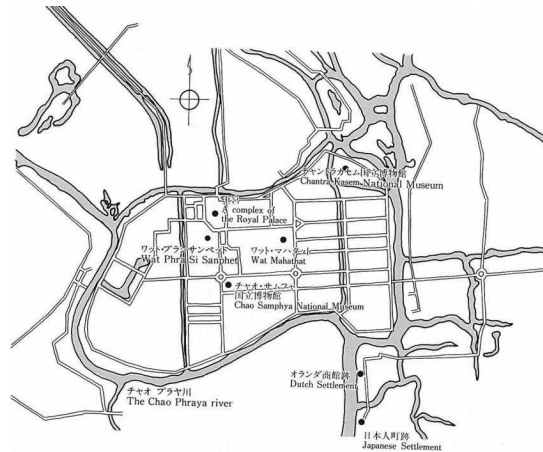
オランダ東インド会社アユタヤ商館跡の発掘調査は、過去2回発掘調査が行われている。調査は、Anek Sihamat氏の御厚意で行った。

このうち2004年にオランダ調査隊と共同で行った発掘調査の出土遺物の資料調査を行った。調査は染付磁器を中心に行い確認できた東洋磁器は、約400個体であった。磁器の年代は15世紀～19世紀まで、生産地は中国



アユタヤの位置

景德鎮、漳州窯、徳化窯、日本の肥前の製品が確認された。14世紀以降王国の首都であったこともあり、古い時代の製品が多く混入している。オランダ商館時代の貿易陶磁器はスワトウが最も多く、本国とは異なる様相が伺えた。



アユタヤの略図

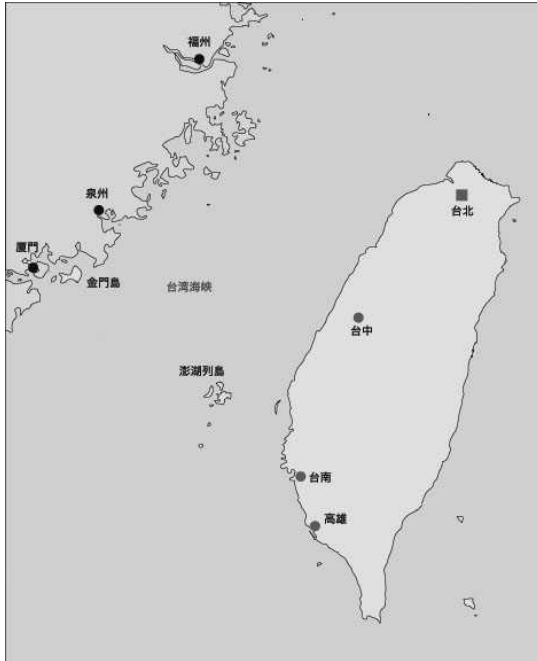
ベトナム・ホイアン

菊池誠一氏によれば、ホイアンは「阮朝政権下の国際貿易港として各国商人や宣教師が集う都市であった」(菊池2002)。調査は菊池氏の協力によって整理作業の一貫として行った。当該地点の発掘調査の概略は、日本考古学協会総会にて報告されている(菊池・小野田・吉田2007)。調査面積が限定的であったため、全体相として陶磁器様相に言及することは難しい。ただし、出土していた肥前磁器は、ヨーロッパに輸出されているものとは明らかに差異があり、ホイアンの生活に即したもので構成されていた。

台湾・ゼーランドディア、澎湖島

ゼーランドディア城は1623年オランダの貿易拠点の確保のため、現在の台南市に築城されるが、1662年鄭氏によって占領、オランダの勢力は駆逐された。オランダがゼーランドディア城を建設する前に澎湖島を一時期占拠する。

調査は、台湾大学中央研究院劉益昌氏の協力によって行うことができた。ゼーランディア城の発掘調査では東洋陶磁器が確認されたが、出土量が少なく傾向を把握するには至らなかったが、明らかにヨーロッパから持ち込まれた陶磁器などが出土してした。



台南市（ゼーランディア城）、澎湖島の位置

(3) 国内調査中継地の調査

長崎

川口洋平氏によって長崎の流通資料としての報告がなされている（川口 2006、2007 など）。調査は川口氏の御厚意によって栄町遺跡、万才町遺跡出土資料について行った。資料は肥前磁器製品で構成されていた。ここには明らかに東南アジア向けの荒磯文碗などの製品とヨーロッパ向けの燭台や芙蓉手などの製品とが混在している状況が看取された。比較的生産地に近い流通資料の様相がうかがえた。

出島では、整備の関係で 17 世紀まで行えない状況であったが、出土している貿易陶磁器は膨大な量である。出島の性格から出土遺物に対して、出島の中で使用されたもの、

商品として出て行くはずのもの、商品として日本国内に入ってくるものの三種類が想定できる。調査は、山口美由紀氏の御厚意で中国磁器に対して行った。ヨーロッパで多く出土しているカップ&ソーサーやプレート類が多く確認できた。

平戸

萩原博文氏によると、平戸オランダ商館は 1609 年東アジアの最前基地とし設置された以降、1641 年長崎に商館が移る 33 年間経営されていた。発掘調査は 1987 年から継続的に行われている。資料調査は、萩原博文氏、塩塚浩一氏の御厚意で、1616 年の海岸石垣造成に伴う造成土中から確認された一括資料について行った。当該資料は既にくつかの研究によって紹介されている（萩原・前田 2002、川口 2006 など）。資料は 17 世紀初頭の中国景德鎮窯青花磁器が主体で構成され、芙蓉手などが揃いで出土している。これまでは貿易途中で破損したものと推定していたが、国内の遺跡でも多く確認される製品でもあることに注意したい。

(4) 沈船資料の調査

ヴィッテレウ

ヴィッテレウ号はオランダ東インド会社に所属する貿易船で、帰路、セントヘレナ島付近にて遭遇したポルトガル船と交戦し、1613 年 1 月に沈没した。これら沈没の経緯、場所からヴィッテレウは、ヨーロッパに運ばれる品物を積んだ船であるといえる。

ブントオ・カーゴ

ベトナムのコンダオ島沖に沈没した船である。その状況についてはオークションカタログの他に報告書が刊行されている（Christiaan Jorg・Michael Flecker 2001）。報告では、コンダオ島は、中国、北ベトナムからインドネシア北東の島々までを航海す

る船の水の補給基地として使われた島であり、ブンタオ・カーゴモバタビアに向かっての航海中に沈没したと中国のジャンク船であろうと推定している。沈没年代は、積載されていた康熙年間の貨幣や硯の文様、陶磁器の年代から 1690 年頃であろうと推定される。

カマウ

ベトナム南部カマウ沖に沈没した船である。その状況は報告書によって知られる (Nguyen Dinh Chien2002)。報告では船が広東からベトナムの陸伝いに南下してカマウ沖で沈没したと推定しており、130,000 点以上の破片が良好な状態で引き上げられたと報じている。また、資料中に含まれていた「雍正年製」、「大清雍正年製」などの銘款からその沈没は雍正年間(1723～35)と推定される。

参考・引用文献

- 川口洋平 2006 「蔵と沈没船 - 長崎・平戸の流通一括資料 - 」 『貿易陶磁研究』No.26 日本貿易陶磁研究会
- 川口洋平 2006 「蔵と沈没船(続編) - 移動する陶磁器の比較研究 - 」 『貿易陶磁研究』No.27 日本貿易陶磁研究会
- 菊池誠一 2002 「遺跡分布からみたホイアン地域の形成と展開」 『桜井清彦・菊池誠一編 近世日越交流史』 柏書房
- 菊池誠一・小野田恵・吉田泰子 2007 「ベトナムの世界遺産ホイアンの考古学調査」 『日本考古学協会第73回総会 研究発表要旨』 日本考古学協会
- 萩原俊文・前田秀人 2002 「平戸オランダ商館の実態と発掘調査」 『掘り出された都市』 日外アソシエーツ
- 堀内秀樹 2007 「オランダ消費遺跡出土の東洋陶磁器 - 十七世紀から十九世紀における東洋陶磁器貿易と国内市場 - 」 『東洋陶磁』VOL.36 東洋陶磁学会
- Christiaan Jorg・Michael Flecker 2001 『Porcelain from the Vung Tau Wreck』 Oriental Art
- C.L. van der Pijl Ketel WITTE LEEUW RIJKS MUSEUM

Nguyen Dinh Chien 2002 「TAU CO CA MAU The Ca Mau Shipwreck 1723 -1735」

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

堀内秀樹、オランダ消費遺跡出土の東洋陶磁器 十七世紀から十九世紀における東洋陶磁器貿易と国内市場、東洋陶磁、36号、39-60頁、2007、査読あり

〔学会発表〕(計1件)

堀内秀樹、17～19世紀の陶磁器貿易を検証する、研究集会 17～19世紀の陶磁器貿易を検証する、2008年10月25日、東京大学生産技術研究所総合実験研究棟

6. 研究組織

(1) 研究代表者

堀内 秀樹 (HORIUCHI HIDEKI)
東京大学・大学院人文社会系研究科・助教
研究者番号：30173628

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし

(4) 研究協力者

金田 明美 (KANEDA AKEMI)
ライデン大学
川口 洋平 (KAWAGUCHI YOUHEI)
長崎県教育庁
小林 克 (KOBAYASHI KATSU)
東京歴史文化財団
櫻庭 美咲 (SAKURABA MIKI)
九州産業大学 柿右衛門 COE 研究員
野上建紀 (NOGIMI TAKENORI)
有田町教育委員会